

親捨てもっこ

梗概 昔の話だけどね、これは六十歳になると男でも女でも、アムトゥの下に連れて行かれて捨てられたという話だけれども。これは、お婆さんだったのかお爺さんだったのかわからないけれど。六十歳になったので、子どもたちと孫たちに、もっこと棒でかつがれて山に連れて行かれた。すると、このお婆さんが、子どもや孫たちに、「おまえたちも、私の年になったら、よく覚えておきなさいよ。六十歳になったら子どもたちや孫たちに、またここに連れてこられることもあるはずだから、よく覚えておきなさいよ。」と、このお婆さんかお爺さんかわからないけどおっしゃった。すると、この子どもたちや孫たちは驚いて、「そうだね、もうこれはお爺さん、お婆さんがいうことはもっともだ。これはもうたいへんなことだ。」といって、お婆さんに、「ではお婆さん、これはもう私たちが悪かったですから、家に帰りましょうね、お婆さん。」といった。けどお婆さんは、「いいえ、私はもう、おまえたちがここに連れてきたから、このアムトゥの下で年をとるから、帰らないよ。」と断った。どうしても、またこの子どもたちは、「そうすると、私たちも、六十歳すぎたらここに連れてこられるから、ぜひつれて帰らないといけない。」と思い、お婆さんをなぐさめて相談した。それでお婆さんも納得して、家に帰ったという話があります。そして、このもっここの棒は、家庭の宝だからとお婆さんが、「これは宝だから、もう大切にしておきなさいよ。」といったという話があります。

話者情報 1914（大正3）年生まれ 男性
記録日 1983年3月25日
分類 動物昔話